いっぷく

まごころ銘茶　狭山園だより

平成28年10月

多治見はあつい

岐阜県多治見市美濃焼ミュージアム

今から40～50年前、大きな風呂敷包みを背負って年に数回店にやってくる人がいた。風呂敷包みから、皿や小鉢や茶碗が次から次へと出てきた。どの器にも唐子模様の染付けがされていたのをよく覚えている。お客様への景品として、喜ばれていた。愛想のいい風呂敷包みを背負った人が、岐阜県多治見市からやって来ていることを後から知った。

●

遅い梅雨明けの数日後、多治見市の美濃焼ミュージアムを訪ねた。所長の渡部誠一さんが迎えてくれる。渡部さんは1300年の歴史をもつ、各時代の器を前に丁寧に説明をしてくれた。

「美濃焼とはひとつの技術ではなくて、東濃地方（可児市、多治見市、土岐市、瑞浪市、笠原町）で焼かれた焼き物の総称なんです」と渡部さんは、話し始めた。

美濃焼はその時々の時代背景や技術の革新によって発展してきた。東濃地方では7世紀には数基の窯があり、須恵器が焼かれていたが、全国有数の窯場となるのは平安時代になってからである。愛知県の猿投窯（さなげよう）から灰を原料とした釉薬を使う灰釉陶器の技術が伝わると美濃焼は信州を足場に全国に流通していくようになった。その後、灰釉に銅を混ぜて焼くとできる緑色の発色が特徴の緑釉陶器へと進化をとげていきます。しかし12世紀頃には中国からの輸入が増えるにつれ、無釉の碗や皿を焼く窯に転じていき、流通圏も一気に縮小し、東海地方の限られた地方窯へと変わっていきます。

15世紀に瀬戸の陶工が美濃に開窯し「古瀬戸」の時代が始まります。窯にも大きな変化が生まれ、それまでの半地下式窖窯（あながま）から半地上式の大窯へと転換していきます。これにより窯面積や容積の拡大、燃焼効率が向上し、施釉陶の安定生産が可能になりました。そして安土、桃山時代の自由闊達な空気と畿内における茶の湯の隆盛を受けて、すばらしい技術が生まれてきます。素地に鉄分を塗る、あるいは灰釉にわずかに鉄分を加え、酸化焔（酸素を十分に送って焼成するときの焔）で焼成することで灰釉を黄色化しています。さらに胆礬（【たんばん】硫酸銅からなる鉱物。酸化焔によって緑色になる）による緑、鉄による褐色が黄色の地に彩りを添えました。この黄瀬戸を焼成中、真っ赤に焼けた茶碗を取り出し水で急冷することによってできる漆黒は瀬戸黒と呼ばれ、また新たな一歩となります。形も腰がしっかりと張った筒状の茶碗となり、縦に箆（へら）を使い表面を大胆に削り取った力強い表現を作っていきます。

16世紀末になると、長石釉を使った志野焼が登場します。長石釉を使うことで、下絵付けができるようになり、白い器が生まれます。この長石釉をベースにいろいろな技術を複合させ紅志野、赤志野、鼠志野、練込志野など貪欲に新しい焼き物を作り出していきます。

そして織部焼の時代をむかえます。織部焼というと銅緑釉を使った緑色の模様とゆがんだ形が印象的ですが、技術的にみるとそれまでの焼物の技術を発展、複合させて作っています。いわば黄瀬戸、瀬戸黒、志野焼の技術の集大成でもあったわけです。この時期、唐津より連房式登り窯が導入され、焼成の熱効率はさらにあがり絵もよりはっきりとしてきます。織部焼はとくに関西で人気となり、それとともに先端の情報の入口となったのです。しかし江戸時代に入ると安定と不変が求められるようになり、斬新で革新的なものが疎まれてきます。時代は磁器へと動き出します。江戸時代末期、陶石だけで焼かれる有田の磁器生産に遅れること200年、陶石のない東濃では調合により有田より透光性のよい長石質磁器が作られるようになります。明治になり、染付の技法も色々開発され、東濃は磁器の一大生産地となってきました。数々の名工により諸外国でも高い評価を得るようになり、今では日常使用する食器類の約半分はこの美濃焼で占められています。

●

昭和に入り鉄道が発達してくると美濃焼の卸売業者は、精力的に見本を持って地方へ旅売りに出ます。これが冒頭の風呂敷包みの人だったのです。今ではその姿も見ることができませんが先日ふと、かつて都内の問屋で見かけた美濃焼の磁器のことを思い出しました。けっして高価ではないのですが、落ち着いた青と緑の模様が特徴の食器です。多治見市内のショールームを訪ねてみると、その一角に「庫山窯・青華緑彩」のコーナーがありました。当時のままの色の器が並んでいます。話を聞いてみると、先代の社長がとくに思入れた商品で、釉面の上に絵付けをし、それを高温焼成することで釉面の中に絵が染み込み独特の風合いを醸し出しているということでした。

各時代を彩る名工たちの努力と、そこで燃える窯の焔、今年も多治見は熱かった。

多治見市美濃焼ミュージアム所長　渡部誠一さん